

[平成29年度 地域創造学賞]

2種類の地域活動から見る 「地域デビュー」実現に向けた研究

立花 理駆

目次

第1章	研究の問題意識と目的
第2章	研究テーマをめぐる概況
第3章	研究対象地の特徴
第4章	地縁型活動の実態調査
第5章	テーマ型活動の実態調査
第6章	実態調査の比較
第7章	研究の総括と結論

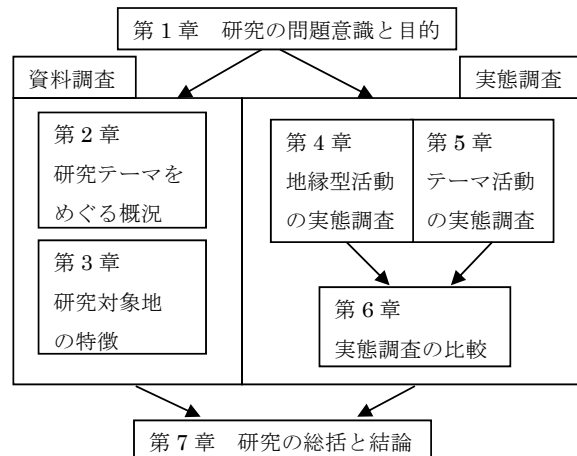


図1-1 本論文の構成

第1章 研究の問題意識と目的

(1) 基本的な問題意識

近年地域課題が多様化し、地域内のつながりの強化や孤立防止等、課題解決に役立つ地域住民の地域参加が必要だと考えられている¹⁾。しかし、退職後の地域参加支援等の地域回帰推進事業が少ないことや、地域コミュニティが閉鎖的な側面をもつことから、参加意欲があっても参加が困難な人が数多く存在しているといわれている²⁾。このため、参加意欲のある人が地域活動に容易に参加できるように、地域活動に初めて参加すること、いわゆる「地域デビュー」の促進が一層求められる³⁾。そして多くの人が地域デビューを実現できるように、地域デビューするまでのプロセスの実態や地域デビューを円滑に進めるための課題を明らかにすることが求められている。

(2) 研究目的

そこで、本研究は、地域活動に関心や意欲を持つ人の参加を促すために、地域デビュー達成までのプロセスの実態から、実現するための条件と課題を明らかにすることを目的とする。なお、地域活動は一般的に「地縁型活動」と「テーマ型活動」の2種類に分類されるが⁴⁾、本論文では、地域デビューをするまで（地域活動を始めるまで）を対象に、それぞれの活動のプロセスの実態を探るものとする。

(3) 本論文の構成

2章は研究の背景や課題について文献・資料をもとに明らかにし、3章では資料をもとに研究対象地の実態を記す。4～5章で地域活動に参加した人々を対象とした実態調査の結果を記し、6章で実態調査の比較を行い、7章で総括する。

第2章 研究テーマをめぐる概況

2-1 地域活動の実態

(1) 地域活動の定義

地域活動には、「地縁型活動」と「テーマ型活動」の2つの定義がある。まず、地縁型活動は、地域福祉の充実やまちの安全確保等の地域課題を解決することを目的としたというもので、老人給食サービスや防犯パトロールのような活動が該当する。一方でテーマ型活動は、特定のテーマに基づき、個人の生きがいや生活充実を図るものであり、趣味の会やスポーツサークル等が典型的な活動である¹⁾。そこで本研究では、前者の地域の課題解決を目的とした地縁型活動と、後者の個人の生活充実を目的としたテーマ型活動の両方を、「地域活動」と定義する。

(2) 地域活動の必要性ともたらす効果

近年において、孤立防止や介護予防等の地域課題が増大かつ多様化し、その課題に対して住民たちが協力しながら、解決していく必要性が高まっている。加えて、地域特性を活かし、活力ある地域を維持していくために、住民たちが地域の将来展望の決定に携わる必要があると考えられている。このため、これらの地域課題の解決や地域の将来展望の決定等、地域における住民の役割は増大し、住民が地域の担い手になることが求められている。

しかし近年、地域でのつながりの希薄化が進行し、住民同士が協力して地域を担うことが困難になっている。その背景には、地域で互いに助け合う機会の減少や、住民同士の交流が少ないこと等がある²⁾。

地域の担い手を確保するために、地域住民のつながりを強め、今後の地域の担い手を育成する効果をもたらす地域活動が重要であり、住民が活動に参加することが必要である。

こうした地域活動は住民同士の交流の場となり、今まで接点がなかった人同士のつながりを強め、地域のネットワークをより強いものにする効果を持っている³⁾。また人々に地域課題の解決を促し、地域の問題解決力を向上させる効果を持つと考えられている⁴⁾。さらに、人々が環境保全、孤立防止等の地域課題を自ら発見し⁵⁾、活動を継続していくうちに、自分自身が地域の担い手であるという認識を持つようになると期待されている⁶⁾。

このように地域活動は、地域でのつながりを強め、住民たちをこれからの地域の担い手として育成する効果を持っている。したがって、地域が抱える課題に対して自ら行動し、解決していく環境を実現するには、地域活動に参加すること、いわゆる「地域デビュー」の促進が一層求められる。

2-2 地域デビューの現状

(1) 地域デビューの定義

地域デビューは、「趣味、地域行事といった活動内容を問わず、地域で行われている活動（地域活動）に初めて参加すること」と定義されている⁷⁾。本研究で対象とする地域デビューは、その活動内容は問わず、地縁型活動とテーマ型活動のどちらも含み、また活動エリアは自分の住んでいる地域に限らないものとする。

(2) 地域デビューの実態と実現できない要因

地域デビューの実態についてみると、まず、国民が地域を元気にするための活動(地域活動)への参加意向(図2-1)について見てみると、平成17年、19年ともに、「積極的に参加したい」と「機会があれば参加したい」の合計が60%を超えており(平成17年:66.7%、平成19年:70.4%)、地域活動の参加意欲が高い人が多い。また平成17年から19年にかけて参加意向がわずかであるが、強まっており、年々地域活動に関心を持っている人が微増している⁸⁾。

しかし、地域活動の参加率(図2-2)を見てみると、平成21年度から23年度までの全てが20%台で、実際に地域デビューできている人は少ない。参加意欲が高くても、実際の活動に参加できない人が数多く存在するものと思われる⁹⁾。

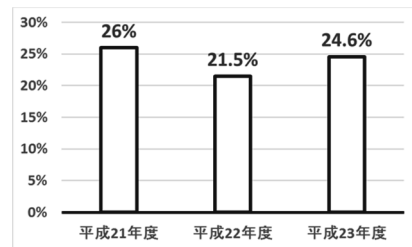
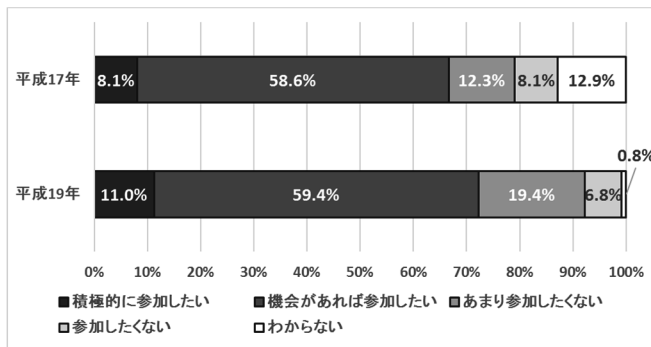


図2-1 国民が地域を元気にするための活動(地域活動)の参加意向(平成22年度国民生活選好度調査) 図2-2 地域活動の参加率(平成22年度国民生活選好度調査)

続いて、地域活動の参加が困難な理由(図2-3)に着目すると、「活動する時間がない」(35.9%)、「全く興味がない」(15.1%)、「参加するきっかけが得られない」(14.2%)等の理由が多く、個人的な理由で参加が困難な人が多い。また「身近に団体や活動内容に関する情報がない」(11.1%)のような地域側の問題も理由にあがっている¹⁰⁾。

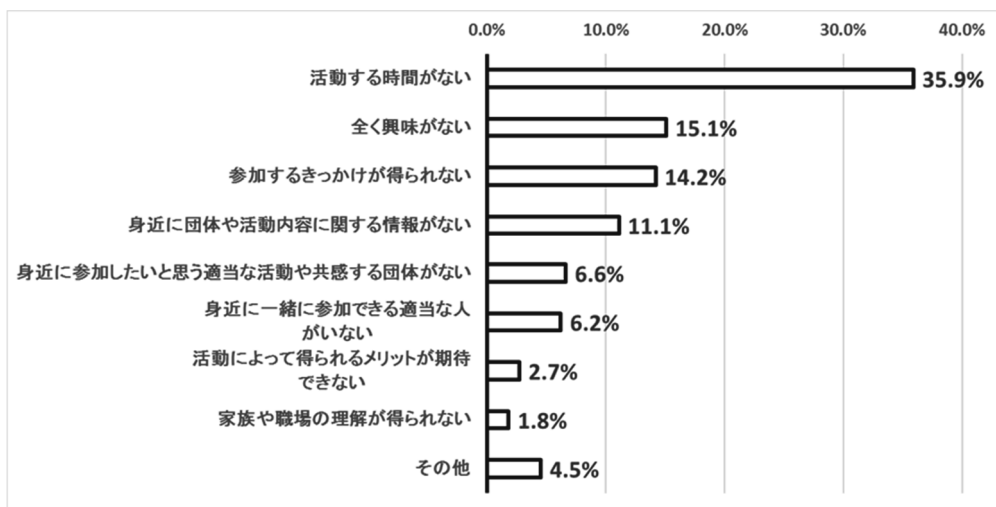


図2-3 地域活動の参加が困難な理由(平成15年度国民選好度調査)

地域活動参加率が低下し、地域デビューを困難にしているのは、「活動に参加する時間がない」、「全く興味がない」等の個人的な理由が大きく影響していることも事実であるが、原因はそれだけではない。他に地域デビューを困難にしている要因は、概ね4つあると考えられている。

1つ目は、退職後の地域参加支援等の地域参加を促進する事業が少ないことである。多くの地方自治体は、移住・定住の施策を熱心に取り組み、地域参加促進事業には消極的である。そのため、地域参加のサポートがほとんどない状態で、新たなコミュニティに参入しなければならないので、活動の参加を困難にしていると考えられている¹¹⁾。

2つ目は、就労第一主義による地域とのかかわりが薄い人々が増加したことである。日本の就労第一主義によって、特に男性は仕事に時間を拘束され、就労以外の社会参加を困難にしている。加えて、日本の労働時間は世界的に見ても長く、家族や地域社会との関わりが希薄になる、いわゆる「関係貧困」に陥りやすく、退職や失職と同時に孤立することもあると考えられている。そのため、仕事以外の人間関係が築きにくく、地域での活動になかなか踏み出せないでいる人が多いと言われている¹²⁾。

3つ目は、日本社会全体で、生涯現役志向が強まったことである。定年延長・再雇用制度によって、定年後の労働が当然の状況になった。そこで仕事にやりがい・生きがいを見出している勤労意欲の高い人が増加し、社会全体で生涯現役志向が強まった。これにより仕事でのコミュニティの滞在を延長し、地域のコミュニティに参加するタイミングを遅らせてしまっている人が増加していると考えられている¹³⁾。

4つ目は、女性中心の地域活動のコミュニティが多いことである。男性は平日のほとんどの時間を仕事で拘束され、地域活動に参加できるのは夕方以降に限定される。それに対して女性は、男性よりも活動時間に融通が利き、平日昼間でも活動が可能な方が多い。そのため、平日昼間を中心に活動している地域活動コミュニティのほとんどは、女性中心で構成されている。そのようなコミュニティにいきなり参加するのは、地域とのかかわりが薄い男性陣にとってハードルが高く、困難であると考えられている¹⁴⁾。

このように、地域回帰事業の希少さや、就労優先の社会制度、生涯現役志向の増大、女性中心の地域活動のコミュニティが多い等の理由から、活動意欲があっても、実際に地域デビューすることが困難となっているものと思われる。

そこで、地域活動に関心がある人々が容易にデビューできるように、地域デビューを、地縁型・テーマ型活動の2つに分け、それに参加するまでのプロセスと、地域デビューした後の意識の実態を明らかにしていく。

第3章 研究対象地の特徴

3-1 鳥見地区の概要

(1) 鳥見地区周辺の概要

研究の主な対象地となる鳥見小学校区(以下鳥見地区とする)は、奈良市最西部に立地し、昭和40年代に当時の日本住宅公団が計画的に開発した住宅地を中心としている。鳥見地区は、鳥見町1丁目から4丁目、三松ヶ丘町の一部、三碓町で構成されている。奈良市保健福祉部福祉政策課の校区別・住民基本台帳によると、鳥見地区は、平成23年と平成28年を比較して、地区の総人口は7390人から7252人と138人減少し、高齢化率は27%から31%と微

増している¹⁾。また15歳以下の子どもの人口割合は13%であり、特に、UR団地のある鳥見町4丁目は、平成22年度時点で、総人口のわずか8%に留まっている²⁾。

続いて従業地別の就業者数(表3-1)に着目すると、鳥見地区全体で、他県での従業者が多く、鳥見町4丁目を除いて、他県での従業者が総数の半分近くを占めている。この結果から鳥見地区では、自分の住む地域から出て仕事をする人が多く、平日の昼間に地区と関わる人が少ないと考えられる³⁾。

表3-1 従業地別の就業者数(平成27年度国勢調査)

		総数	自宅で従業	自宅外の自 市区町村で従業	県内他市区町 村で従業	他県で従業
鳥見町	総数	1816	96	588	255	812
	1丁目	246	22	68	20	127
	2丁目	314	24	76	28	178
	3丁目	511	20	160	66	250
	4丁目	745	30	284	141	257
三碓町		392	15	120	56	185
三松ヶ丘		246	13	78	28	125
総計		2454	124	786	339	1122

3-2 実態調査の位置づけ

本調査では、地域デビューのためのプロセスや、デビュー実現の条件を明らかにするために、地縁型活動に参加している人々とテーマ型活動に参加している人々を対象に調査を行った。地縁型活動は奈良市鳥見地区社会福祉協議会が主催する「ふれあい食事会」を事例として取り上げ、調査を行った。

テーマ型活動は、1日限定のイベント型のものや、一定期間継続する活動もある。そこで本調査では、テーマ型活動を「単発型」と「継続型」の二つに分けて調査を行った。単発型の活動は、富雄公民館の単発の講座型イベントである「世界のボードゲーム大会」を取り上げ、継続型は、1年間退職後のライフスタイルを学ぶ「奈良フェニックス大学」を取り上げ、それぞれ調査を行った。

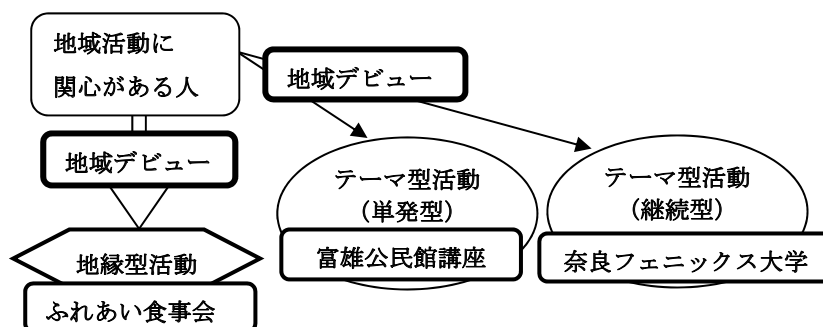


図3-1 地域デビューのプロセスイメージ図

3-3 実態調査の対象の概要

(1) 鳥見地区社会福祉協議会の「ふれあい食事会」

地区社会福祉協議会(以下、地区社協とする)は、「住民参加による地域福祉活動を通じて、地域のふれあいを高めるとともに、住民ひとりひとりの福祉課題を地域全体の課題として

とらえ、その解決に向けた取り組みを行うことにより、誰もが安心して暮らすことができる福祉のまちづくりを、地域住民自らが自主的に実践するために結成されている組織」と定義されている。奈良市では、概ね小学校区域を範囲として、現在46地区にそれぞれ地区社協が結成されている。地区社協は、地域内の福祉関係団体等を中心とした、自治会や民生委員等の組織や住民で構成されている。また地区社協の活動は、地域づくりや何か地域の役に立ちたい等の理由から、誰でも気軽に活動に参加することができる⁴⁾。

鳥見地区社協は、①高齢者の生活問題、②児童・子育てに関する問題、③障害児・者の生活問題、④日常生活の中にある問題の4つ問題の改善のために、様々な活動を展開している。それらの活動一環で、高齢者の生活問題の改善を目的とした「ふれあい食事会」という活動を主催している。その活動内容は、70歳以上の単身の高齢者を対象に、孤立防止や仲間作り、情報交換の実現のために、参加者全員で会食するというものである。活動には、鳥見地区社協のほかに、鳥見地区の住民がボランティアとして参加し、主に会場設営や調理、配膳を行っている。開催頻度は月に1回で、約30名がボランティアとして活動に参加している。なおボランティアの参加者のうち、約20名は会場設営と配膳を担当し、そして残りの約10名は調理を担当している。また、調理担当は、10名のグループが3つ存在し、3つのグループ内で3カ月に1回調理担当する当番制を設けている⁵⁾。

(2) 富雄公民館講座「世界のボードゲーム大会」

富雄公民館は、奈良市にある社会教育施設の一つで、鳥見町2丁目に位置し、主にボランティア活動、社会教育の場・機会を提供している。

鳥見地区では、地域で活動している団体に加入したいという意欲は年々高まっているが、実際に活動に参加している人は少ない。また地区の高齢化に伴い、地域活動運営者の高齢化の進行や、地域活動運営者の第一世代が主力となって活動しているため、第二世代が育たないという課題がある。このような地区課題を解決するために、鳥見地区に住む人々に、地域活動参加を促すための講座の開催や、自主団体の活動支援に注力している。

富雄公民館の講座の一つである「世界のボードゲーム大会」は、NPO法人「世界のボードゲームを広める会ゆうもあ」と共に主催する講座型のイベントで、地域参加を促すとともに、ボードゲームを通じて多世代交流を実現することを目的としている。子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめることを重視しており、誰でも自由に参加できることから、年々参加者が増加している⁶⁾。

(3) 奈良フェニックス大学

奈良フェニックス大学は、2013年に開校し、これからのライフスタイルを学び、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを提供する生涯学習機関である。入学資格は、原則として55才以上としており、学部は、教養学部、地域リーダーカレッジ、研究科の3つ存在する。

教養学部は一年間、座学と実践を通じて、地域でのライフスタイルを学んでいくことを目的としている。座学では、地域づくりや日常生活で役立つノウハウを中心に学び、時には座学で学んだことを実践する活動にも取り組む。

地域リーダーカレッジは、教養学部修了者のみ進学可能な学部で、地域の担い手を育成

することを目的としている。講義で地域プランナー・コーディネータ論、地域資源活用論、地域発展事例研究を学び、地域づくり企画・計画の方法やプレゼンテーション手法・技術を実践しながら習得していく。

研究科は、地域リーダーカレッジ修了者のみ進学可能で、1年間主に地域課題解決の研究活動に取り組む。地域リーダーカレッジでの学びを踏まえ、地域課題解決の研究および実践的な活動を行い、そこで得た成果を、地域リーダーカレッジとの合同研修会、地域づくりシンポジウムにおいて発表する。

また、奈良フェニックス大学で講義を履修した人々のその後(図3-2)は、「地域造り活動への参加」、「同好の仲間とのクラブ活動」、「地域リーダーカレッジへの進学」の3つが考えられている。中でも、地域活動に参加した人々、地域リーダーカレッジへ進学した人々は、「仲間と地域活動組織を設立」、「ソーシャルビジネス」、「既存のNPOや活動組織に加入」と3つの方向性が想定されている⁷⁾。

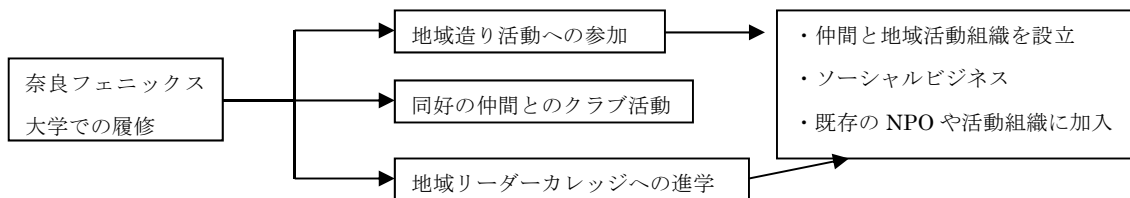


図3-2 奈良フェニックス大学で履修したその後

第4章 地縁型活動の実態調査

4-1 「ふれあい食事会」調査の概要

①調査の対象

奈良市鳥見地区社会福祉協議会(以下鳥見地区社協とする)が主催する「ふれあい食事会」のお手伝い・運営をするボランティアスタッフ(民生委員を含む)計36名

②調査日時

2017年8月17日 9:30～14:30

③調査の方法

ふれあい食事会の片づけ終了後、ボランティアスタッフにアンケート票を直接配布・回収

④調査項目

属性(年齢、お住まい)、ふれあい食事会のお手伝い(継続年数、始めたきっかけ・目的、始めてからの変化)、地域活動(現在取り組んでいる活動の種類)、地域との関わり(人付き合い、地域に対する認知度)、今後の意向

4-2 調査結果

(1)回答者の属性について(回答者の年齢と性別)

まず、回答者数36人で、うち男性9人(25%)、女性27人(75%)だった(図4-1)。年齢の内訳(図4-2)をみると、70代(53%)が最も多く、次いで60代(33%)である。また回答者の全員が鳥見地区に住んでいる(図4-3)。

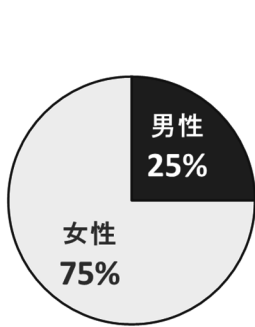


図4-1 性別 (n=36)

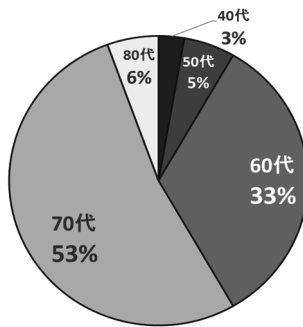


図4-2 年齢 (n=36)



図4-3 住んでいる地域

(2) ふれあい食事会について

①お手伝いの継続年数と地域とのかかわりについて

お手伝いの継続年数(表4-1)についてたずねたところ、最も多いのが「数年継続」(31%)で、次いで「10年以上継続」(28%)である。次に、性別による違いに着目すると、男性は「5～10年継続」(44%)が最も多く、女性は「10年以上継続」(33%)が最も多い。

表4-1 お手伝いの継続期間 (n=36)

	10年以上継続	5～10年継続	数年継続	今年が初めて
男性 (n=9)	11%	44%	33%	11%
女性 (n=27)	33%	11%	30%	22%
計 (n=36)	28%	22%	31%	19%

続いて、活動年数別の地域での人との関わり(表4-2)を見てみると、継続期間が長い人ほど、「趣味・娯楽を一緒にする人がいる」(上から90%、63%、64%、14%)と「住宅を訪問しあう人がいる」(上から70%、38%、27%、14%)の割合が高くなっている。

また、活動年数別の地域の認知度(表4-3)に着目すると、活動の継続期間が長い人ほど、「地域全体に詳しい」(上から30%、38%、9%、0%)と回答している。

表4-2 活動年数別の地域での人との関わり (複数回答) 表4-3 活動年数別地域の認知度

継続期間	関わり					認知度	
	会えば挨拶する人がいる	立ち話等する人がいる	もののやり取りする人がいる	趣味・娯楽を一緒にする人がいる	住宅を訪問しあう人がいる	地域全体に詳しい	自宅周辺には詳しい
10年以上継続 (n=10)	100%	100%	100%	90%	70%	30%	70%
5年以上10年未満 (n=8)	88%	63%	63%	64%	38%	38%	63%
数年継続 (n=11)	82%	82%	18%	64%	27%	9%	91%
今年が初めて (n=7)	86%	100%	43%	14%	14%	0	100%
計 (n=36)	89%	86%	56%	61%	39%		

②お手伝いを知ったきっかけ

お手伝いを知ったきっかけ(表4-4)についてたずねたところ、最も多かったのは「地区社協の方に誘われて」(39%)で、次点で「お手伝いしている友達・知人から聞いて」(22%)である。また「その他」(36%)の回答は、全て「民生委員としての仕事で知った」だった。しかし、お手伝いを知ったきっかけは、地区社協のからの誘いや友人・知人からの口コミが過半数を占め、「ならし社協だよりを見て」や「家族から聞いて」等のきっかけで、参加した人は見

られなかった。

表4-4 お手伝いを知ったきっかけ(n=36)

	地区社協の方に誘われて	ならし社協だよりを見て	お手伝いしている友達知人から聞いて	家族から聞いて	富雄公民館に訪れた時に知って	ふれあい食事会に参加者として参加したとき	その他	不明
男性(n=9)	56%	0%	0%	0%	0%	0%	33%	11%
女性(n=27)	33%	0%	30%	0%	0%	0%	37%	0%
計(n=36)	39%	0%	22%	0%	0%	0%	36%	3%

③お手伝いに関わろうと思った理由(複数回答)

お手伝いに関わろうと思った理由(図4-4)についてたずねたところ、「地域参加のため」と「自分が住む地域に貢献するため」(各56%)が最も多く、次点で「新たな出会いを求めて」(25%)だった。

また、性別による違いに着目すると大きな違いはないが、「自分が住む地域に貢献するため」に関しては、女性(59%)の方が男性(44%)よりも少し高い。

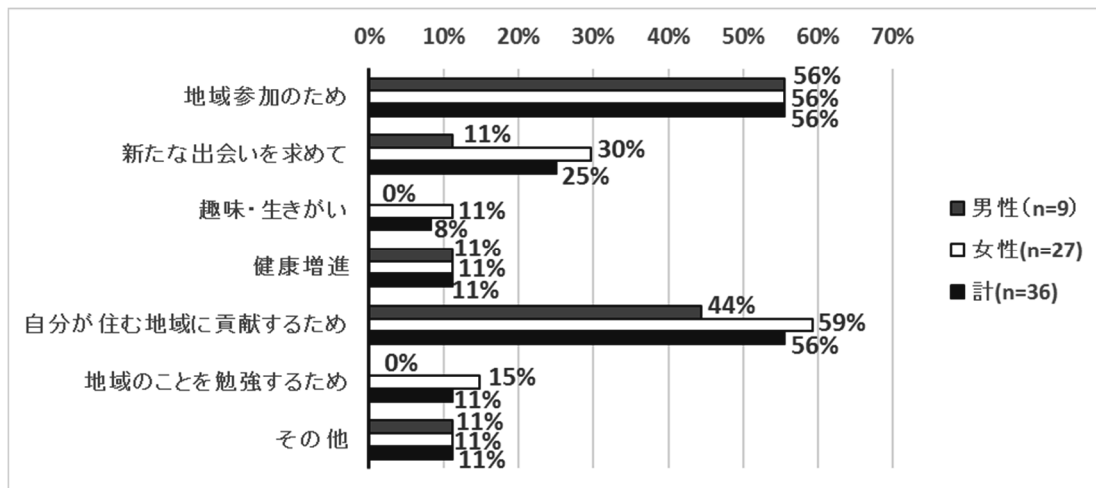


図4-4 お手伝いに関わろうと思った理由(n=36)

④参加してからの変化(複数回答)

お手伝いに参加して良かったこと(図4-5)についてたずねたところ、「新しい友人ができた」(72%)が最も多く、次いで「鳥見地区に対する関心が高まった」(64%)である。

次に参加してからの意識の変化(図4-6)についてたずねたところ、「自分の住む地域に貢献したい」(58%)が最も多い。その一方で、「もっと鳥見地区での地域参加をしたい」(6%)と回答した人は最も少なく、地域参加に関する意識の変化はあまり見られなかった。

また「特になし」(6%)と回答した人も少数であり、回答者の94%が活動を始めてから、何らかの意識変化があった。

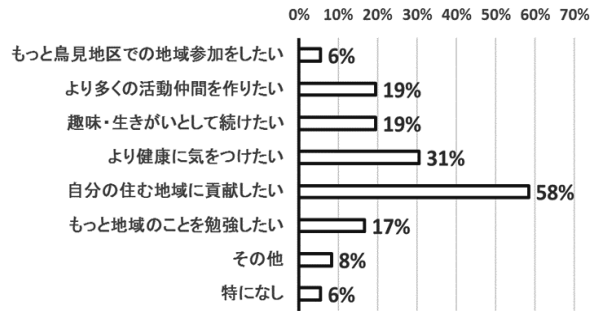
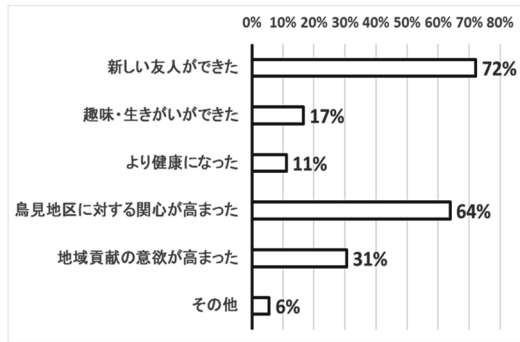


図4-5 参加して良かったこと (n=36) 図4-6 活動に参加してからの意識変化 (n=36)

続いて性別による違い(表4-5)に着目すると、男性は「より健康に気をつけたい」(44%)、「もっと地域のことを勉強したい」(22%)と思う人が多く、女性は「より多くの仲間を作りたい」(22%)、「趣味・生きがいとして続けたい」(22%)と思う人が多い。

表4-5 参加してからの意識の変化 (n=36)

	もっと鳥見地区での地域参加をしたい	より多くの活動仲間を作りたい	趣味・生きがいとして続けたい	より健康に気をつけたい	自分の住む地域に貢献したい	もっと地域のことを勉強したい	その他	特になし
男性(n=9)	11%	11%	11%	44%	56%	22%	11%	11%
女性(n=27)	4%	22%	22%	26%	59%	15%	7%	4%
計(n=36)	6%	19%	19%	31%	58%	17%	8%	6%

最後に、活動を始めた目的別に自身の意識の変化(表4-6)を見てみると、まず地域参加および地域貢献目的で参加した人の70%以上が、「もっと地域貢献したい」と回答している。加えて、「新たな出会いを求めて」、「趣味・生きがい」、「健康増進」等、元々地域参加・地域貢献でない目的で参加した人も、地域貢献の意欲が高まっていた(それぞれ67%、75%)。また「新たな出会いを求めて」、「趣味・生きがい」、「健康増進」の目的で参加した人の50%以上が、「趣味・生きがいとして続けたい」と回答している。また、趣味・生きがい目的で参加した人は、「もっと鳥見地区での地域参加したい」、「より多くの活動仲間を作りたい」(各67%)等の意識変化があった。

表4-6 活動を始めた目的別意識の変化(複数回答)

意識変化 参加目的	もっと鳥見地区での地域参加をしたい	より多くの活動仲間を作りたい	趣味・生きがいとして続けたい	より健康に気をつけたい	自分の住む地域に貢献したい	もっと地域のことを勉強したい	その他	特になし
地域参加のため(n=20)	10%	20%	25%	35%	70%	5%	5%	5%
新たな出会いを求めて(n=9)	0	33%	56%	44%	67%	11%	11%	0
趣味・生きがい(n=3)	67%	67%	67%	0	67%	33%	33%	0
健康増進(n=4)	25%	50%	50%	50%	75%	0	25%	0
自分が住む地域に貢献するため(n=20)	10%	25%	20%	25%	85%	15%	5%	0
地域のことを勉強するため(n=4)	25%	50%	25%	50%	75%	25%	25%	0
その他(n=4)	0	25%	0	25%	0	50%	50%	25%

⑤地域活動の参加実態(複数回答)

ふれあい食事会のお手伝い以外に、現在住んでいる地域で取り組んでいる活動(表4-7)についてたずねたところ、「ボランティア活動」(67%)が最も多く、次いで「趣味・サークル活動」(36%)であった。「自治会役員」(19%)、「PTA役員」(0%)、「老人会」(14%)などの地縁型活動の参加率は低く、回答者の多くはサークルやボランティアのようなテーマ型活動に参加していた。続いて性別の違いに着目すると、男性は「自治会役員」(33%)「老人会活動」(22%)などの地縁型活動の参加率が比較的高く、女性は「趣味・サークル活動」(48%)などの自発的に取り組む活動の参加率が高い傾向がある。

表4-7 現在住んでいる地域で他に取り組んでいる活動(n=36)

	自治会 役員活動	PTA 役員活動	老人会 活動	趣味・ サークル活動	ボランティア 活動	農家園芸活動	その他	特になし
男性(n=9)	33%	0%	22%	0%	67%	11%	33%	11%
女性(n=27)	15%	0%	11%	48%	67%	4%	22%	4%
計(n=36)	19%	0%	14%	36%	67%	6%	25%	6%

⑥今後の意向(複数回答)

今後の意向(図4-8)についてたずねたところ、「鳥見地区で仲間作りを行いたい」(36%)が最も多い一方で、「新しく地域活動に参加したい」(3%)が最も低くかった。また「鳥見地区について勉強したい」(19%)と地区の関心が高まった人や、「知人・友人にふれあい食事会の宣伝をしたい」(14%)と活動の宣伝をしようと思った人も見られた。

続いて、性別による違いに着目すると、「鳥見地区について勉強したい」は男性(33%)の方が多く、男性の方がやや鳥見地区に対する関心が強い。

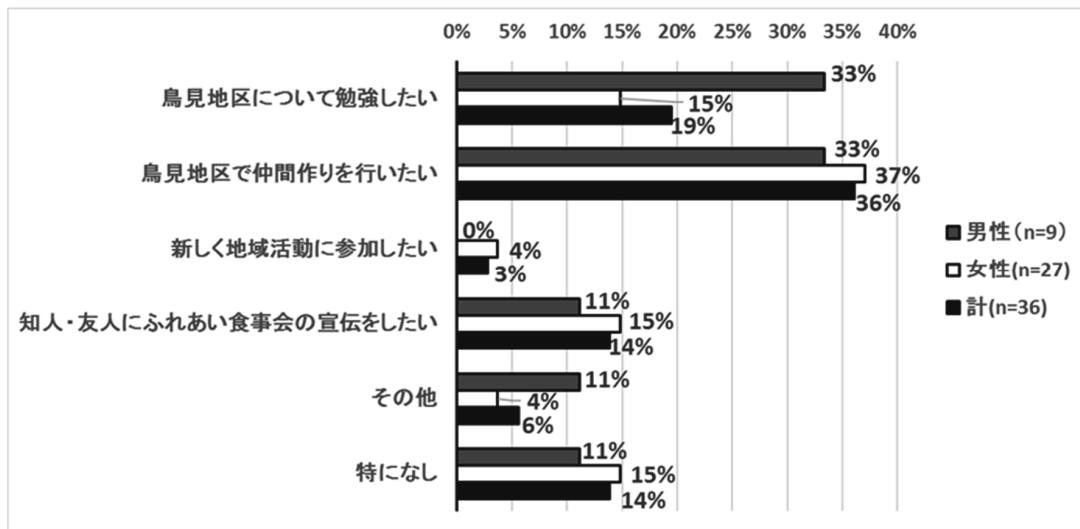


図4-8 今後の意向(n=36)

第5章 テーマ型活動の実態調査

5-1 テーマ型活動(単発型)の実態調査

(1) 富雄公民館調査の概要

① 調査の対象

「世界のボードゲーム大会」(地域の子どもから高齢者までを対象とし、ボードゲームを通

じて多世代交流や地域参加の実現を目的とした講座)の参加者のうち、大人たち30名

②調査日時

2017年8月27日 10:00～16:00

③調査の方法

講座終了後、参加者にアンケート票を直接配布・回収

④調査項目

属性(年齢、お住まい)、講座(参加頻度、知ったきっかけ、参加目的、参加してからの変化)、地域活動(現在取り組んでいる活動の種類)、今後の意向

(2)調査結果

①回答者の属性(年齢、性別、住んでいる地域)

まず、回答者数30人で、うち男性14人(47%)、女性16人(53%)だった(図5-1)。年齢の内訳(図5-2)をみると、40代(48%)が最も多く、次いで30代(29%)で、子育て世代が最も多く参加していた。また住んでいる地域(図5-3)についてたずねてみると、「その他の奈良市内」と回答した人(70%)が最も多い。また奈良市外に住んでいる人(7%)も参加しており、奈良市内や市外でも広く認知されている。

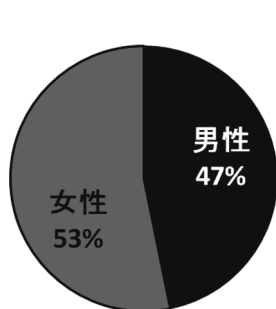


図5-1 性別(n=30)

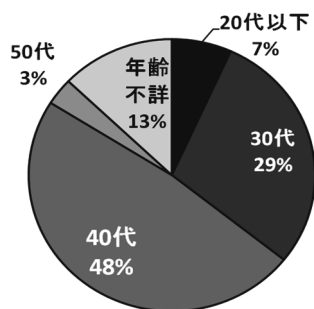


図5-2 年齢(n=30)

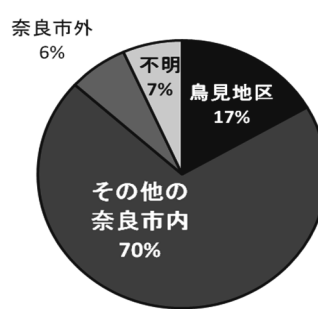


図5-3 住んでいる地域(n=30)

②講座を知ったきっかけ

今回の講座を知ったきっかけ(表5-1)についてたずねたところ、「学校から配布されたチラシ」(30%)が最も多く、次いで「市民だより」(23%)だった。続いて、性別による違いに着目すると、男性は「市民だより」(29%)と「家族から聞いて」(21%)が多く、女性は「学校から配布されたチラシ」(44%)が多い。

表5-1 今回の講座を知ったきっかけ(n=30)

	ホームページ	市民だより	回覧板	学校から配布されたチラシ	友達から聞いて	家族から聞いて	富雄公民館に訪れた時	その他
男性(n=14)	7%	29%	7%	14%	7%	21%	7%	7%
女性(n=16)	13%	19%	0%	44%	6%	6%	6%	6%
計(n=30)	10%	23%	3%	30%	7%	13%	7%	7%

③参加しようと思った理由(複数回答)

参加しようと思った理由(図5-4)についてたずねたところ、「子ども・家族の付き添い」(77%)が最も多く、次いで「趣味・生きがい」(27%)だった。「その他」(7%)は、全て「自分

が興味をもったテーマだから」の回答で、活動の内容に興味を持って参加した人もいた。

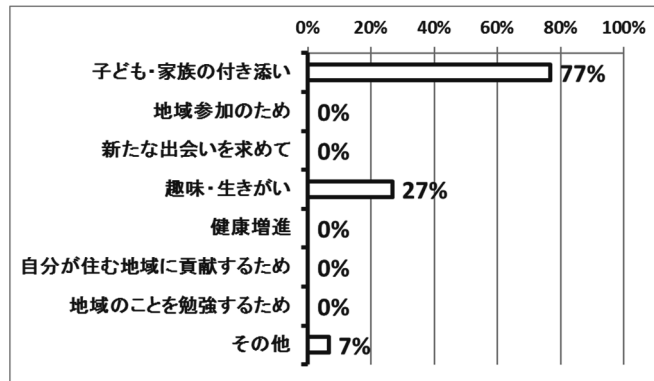


図5-4 参加した理由(n=30)

⑤参加してからの意識の変化(複数回答)

今回の講座に参加してから、どのような意識の変化があったのか(図5-5)をたずねたところ、「趣味・生きがいとして続けたい」(47%)が最も多く、次いで「もっと自分が住む地域での地域参加をしたい」(33%)だった。続いて、性別による違いに着目すると、男性は「もっと自分が住む地域での地域参加をしたい」(43%)の回答が多く、女性は「趣味・生きがいとして続けたい」(50%)や「より多くの活動仲間を作りたい」(19%)の回答が多い(表5-2)。

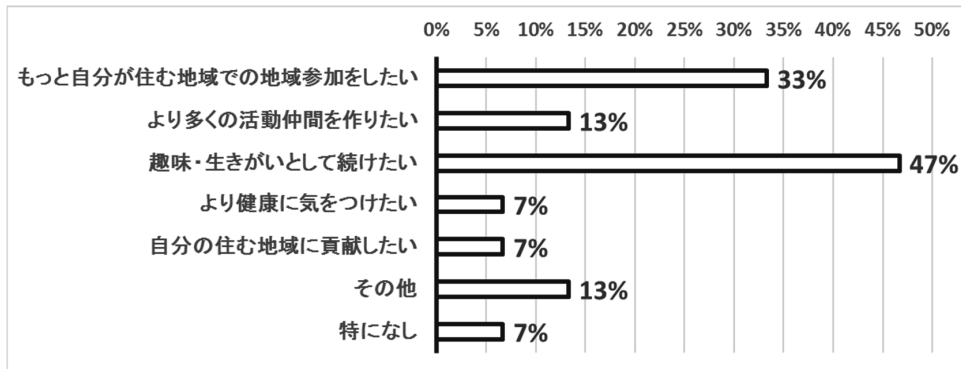


図5-5 参加してからの意識の変化(n=30)

表5-2 性別ごとの参加してからの意識の変化(n=30)

	もっと鳥見地区での地域参加をしたい	より多くの活動仲間を作りたい	趣味・生きがいとして続けたい	より健康に気をつけたい	自分の住む地域に貢献したい	もっと地域のことを勉強したい	その他	特になし
男性(n=9)	43%	7%	43%	7%	7%	0%	14%	7%
女性(n=27)	25%	19%	50%	6%	6%	0%	13%	6%
計(n=36)	33%	13%	47%	7%	7%	0%	13%	7%

また参加目的別にどのような意識の変化(表5-3)があったかを見てみると、まず「子ども・家族のつきそい」で参加した人は、「もっと自分が住む地域での地域参加をしたい」(39%)や「趣味・生きがいとして続けたい」(35%)等の意識の変化が見られた。次に「趣味・生きがい」と回答した人は、「趣味・生きがいとして続けたい」(88%)だけでなく、「もっと自分が住む地域での地域参加をしたい」(25%)、「より多くの活動仲間を作りたい」(25%)の意識の変化があった。これらの結果から、この活動が、元々地域参加が目的で参加していない人々の

地域参加の関心を高めるだけでなく、仲間作りや趣味・生きがいとしての継続に対しても意欲的にしていた。

表5-3 参加目的別の意識の変化(複数回答)

意識変化 参加目的	もっと自分が住 む地域での地 域参加をしたい	より多くの活動 仲間を作りたい	趣味・生きがい として続けたい	より健康に 気をつけたい	自分の住む地 域に貢献したい	もっと地域のこ とを勉強したい	その他	特になし
子ども・家族の つきそい(n=23)	39%	13%	35%	9%	4%	0%	17%	4%
趣味・ 生きがい(n=8)	25%	25%	88%	0%	13%	0%	0%	0%
その他(n=2)	0%	0%	50%	0%	0%	0%	0%	50%

⑥現在取り組んでいる地域活動(複数回答)

現在居住している地域で取り組んでいる地域活動(表5-4)についてたずねたところ、「全くなし」(53%)が最も多く、次いで「ボランティア活動」(23%)だった。また性別による違いが大きく、特に男性は「全くなし」(79%)が圧倒的に多い。一方で女性は、「PTA役員活動」(44%)や「ボランティア活動」(38%)も多く見られるが、「PTA役員活動」(44%)や「ボランティア活動」(38%)等の活動に参加している人も多い。

表5-4 現在居住している地域での地域活動参加実態(n=30)

	自治会 役員活動	PTA 役員活動	老人会活動	趣味・ サークル活動	ボランティア 活動	農家園芸活動	その他	全くなし
男性(n=14)	7%	7%	0%	14%	7%	0%	0%	79%
女性(n=16)	19%	44%	6%	13%	38%	0%	13%	31%
計(n=30)	13%	27%	3%	13%	23%	0%	7%	53%

⑦今後の意向(複数回答)

今後の意向(図5-6)についてたずねたところ、「自分が住む地域で仲間作りを行いたい」(43%)が最も多く、次いで「自分が住む地域について勉強したい」(23%)だった。しかし、「新しく地域活動に参加したい」(3%)と考える人は非常に少なく、地域参加よりも、仲間作りや地域の勉強をしたいという意向が強い。また「特になし」(13%)と答えた理由の中で、特に多かったのが「仕事や家事で時間に余裕がない」だった。

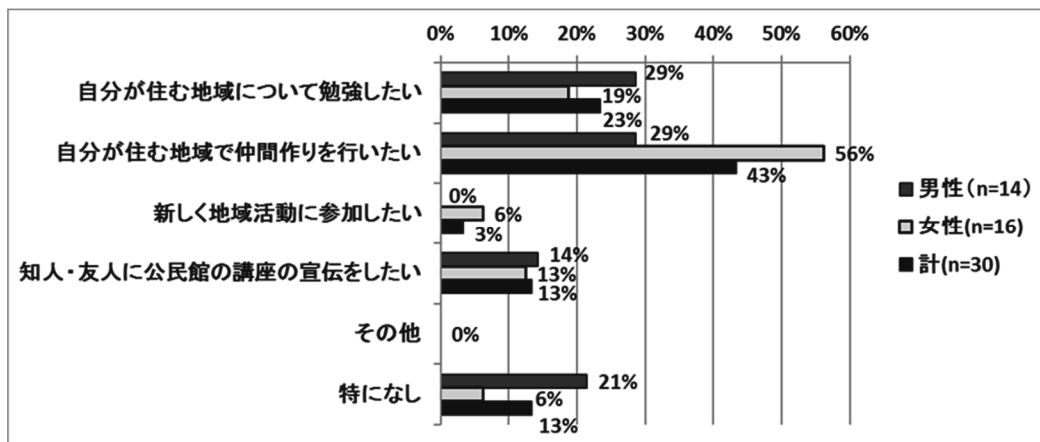


図5-6 今後の意向(n=30)

5-2 テーマ型活動<継続型>の実態調査

(1) 奈良フェニックス大学講義の調査の概要

① 調査の対象

退職後の高齢世代を対象に、今後のライフスタイルを学び、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを提供することを目的に設立されたシニアカレッジ。今回は修了直前の4期生を対象に調査。

奈良フェニックス大学の4期生 男性21人、女性9人の計30人

② 調査日時

2017年3月27日 13:00～15:00

③ 調査の方法

奈良フェニックス大学の講義前に、出席していた4期生にアンケート票を直接配布、回収

④ 調査項目

属性(年齢、お住まいの地域)、奈良フェニックス大学(大学を知ったきっかけ、入学した目的、始めてからの変化)、地域活動(取り組んでいる活動の種類)、今後の意向など

(2) 調査結果

① 回答者の年齢と性別、住んでいる地域

まず回答者数30人で、うち男性21人(70%)、女性9人(30%)だった(図5-7)。次に、回答者の年齢の内訳(図5-8)をみると、65～69歳(63%)が最も多く、次いで60～64歳(17%)で、退職後すぐに活動を始めた人が多いと思われる。

続いて現在居住している地域(図5-9)についてたずねたところ、最も多かったのが「開発によってできた住宅地」(40%)で、次いで「その他一般住宅地」(33%)だった。

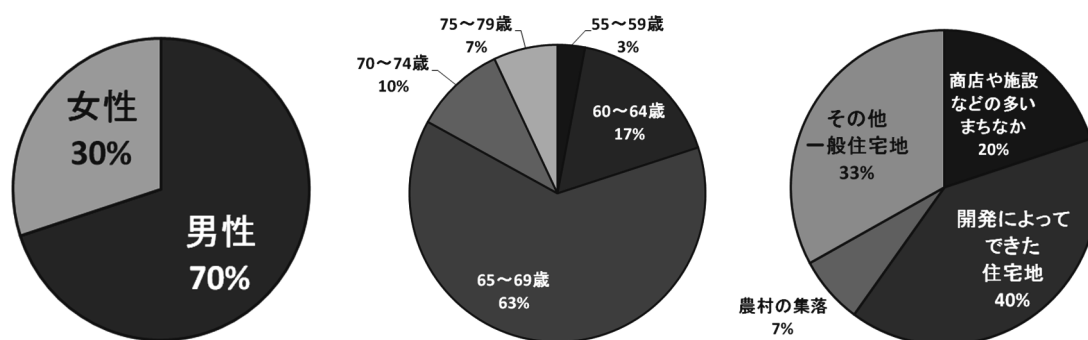


図5-7 回答者の性別(n=30) 図5-8 回答者の年齢(n=30) 図5-9 住んでいる地域の特徴(n=30)

② 奈良フェニックス大学を知ったきっかけ

奈良フェニックス大学を知ったきっかけ(表5-5)についてたずねたところ、「広報誌」(61%)が大半を占めており、次いで「友達から聞いて」(21%)が多い。続いて性別による違いに着目すると、男性はホームページをきっかけに参加した人が多く(19%)、女性は友達や家族からの口コミをきっかけに参加した人が多い(それぞれ33%、11%)。

表5-5 知ったきっかけ(n=30)

	広報誌	ホームページ	友達から聞いて	家族から聞いて
男(n=21)	71%	19%	19%	5%
女(n=9)	55%	0%	33%	11%
計(n=30)	67%	13%	23%	7%

②奈良フェニックス大学に入学した目的(複数回答)

奈良フェニックス大学に入学した目的(図5-10)についてたずねたところ、「新たな出会い」(70%)や「勉強」(63%)が多い一方で、「地域参加」と「地域貢献のため」(各23%)は少なめであり、自身の生活充実や研鑽のために活動を始める傾向がみられた。

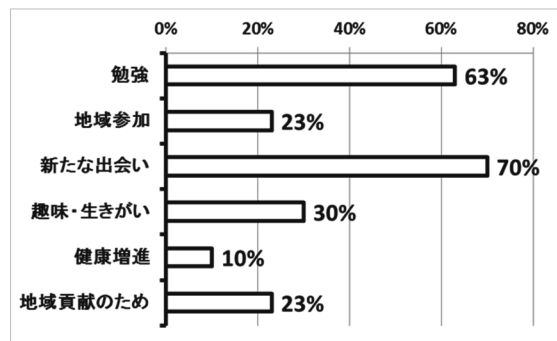


図5-10 入学した目的(n=30)

③入学してからの意識の変化(複数回答)

入学してからの意識変化(図5-11)についてたずねたところ、「もっと勉強したい」(67%)が最も多く、次いで「より多くの仲間をつくりたい」(63%)だった。加えて、「地域参加したい」(30%)、「自分が住む地域に貢献したい」(43%)と回答した人も多い。また「特になし」の回答がなく、少なくとも全員が入学してから何らかの意識の変化があった。

続いて、性別による違い(表5-6)に着目すると、男性の方が「もっと勉強したい」(71%)、「地域参加したい」(38%)と思った人が多く、女性は「より健康に気をつけたい」(55%)と思う人が多い。

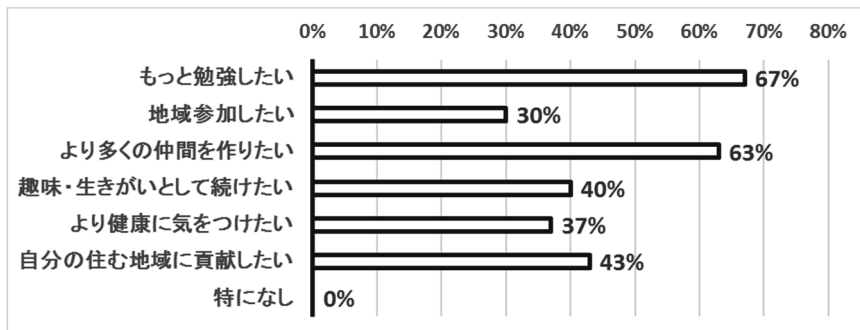


図5-11 入学後の意識の変化(n=30)

表5-6 入学目的別意識の変化(n=30)

	もっと勉強したい	地域参加したい	より多くの仲間を作りたい	趣味・生きがいとして続けたい	より健康に気をつけたい	自分の住む地域に貢献したい
男(n=21)	71%	38%	62%	43%	29%	43%
女(n=9)	55%	11%	66%	33%	55%	44%
計(n=30)	67%	30%	63%	40%	37%	43%

また、入学目的別に意識の変化(表5-7)をみると、地域参加目的で入学した人は「自分が住む地域に貢献したい」(86%)の比率が高く、地域貢献目的で入学した人は「地域参加したい」(57%)の比率が高い。このことからこの活動が、地域参加目的で入学した人の地域貢献の関心を高め、地域貢献目的で入学した人の地域参加をより意欲的にしている。それ以外の目的では、「勉強」(地域参加:26%、地域貢献:42%)と「新たな出会い」(地域参加:33%、地域貢献:48%)の目的で活動を始めた人の割合が高く、もともと地域参加や地域貢献にあまり関心がなかった人々の、関心を高めている。その一方で、「趣味・生きがい」目的で参加した人は、地域参加・地域貢献どちらも、意識の変化がほとんど見られなかった(地域参加:0%、地域貢献:11%)。だが、地域貢献の意識は低くても、「もっと勉強したい」(88%)や「より多くの仲間を作りたい」(44%)等の意識は芽生えており、より深く勉強する等の新しい活動に展開する可能性を持っている。

表5-7 入学目的別意識の変化

意識変化 参加目的	もっと勉強したい	地域参加したい	より多くの仲間を作りたい	趣味として続けたい	より健康に気をつけたい	自分の住む地域に貢献したい
勉強(n=19)	79%	26%	63%	37%	32%	42%
地域参加(n=7)	86%	71%	71%	29%	43%	86%
新たな出会い(n=21)	57%	33%	81%	43%	48%	48%
趣味・生きがい(n=9)	88%	0%	44%	44%	33%	11%
健康増進(n=3)	67%	33%	100%	67%	33%	100%
自分が住む地域への貢献のため(n=7)	86%	57%	57%	43%	43%	86%

④入学前後の地域活動の取り組み実態(複数回答)

入学前後に取り組んでいた地域活動(表5-8)についてたずねたところ、まず入学前の活動は「趣味・サークル活動」(40%)が最も多く、次いで「自治会役員活動」(33%)だった。また平均回答数が1.2個であり、回答者全員が少なくとも入学前に何らかの地域活動に取り組んでいた。次に入学後現在に取り組んでいる地域活動は、「趣味・サークル活動」(70%)が最も多く、次いで「ボランティア活動」(33%)だった。平均回答数は1.6個であり、こちらも回答者全員が何らかの地域活動に取り組んでいる。

続いて入学前後の活動の取り組みの変化についてだが、まず平均回答数が1.2から1.6と増加しており、入学後の取り組んでいる活動数が微増した。特に男性の趣味・サークル活動の参加率が大きく上がっており(43%→81%)、入学から約1年後に、回答者の70%が趣味・サークル活動に携わっている。その一方で、自治会役員活動やPTA役員活動等の地縁型活動の参加率は、男女ともに低下している。

表5-8 入学前後の地域活動取り組み実態(n=30)

		自治会役員活動	PTA役員活動	老人会活動	趣味・サークル活動	ボランティア活動	農業園芸活動	平均回答数
入学以前に取り組んでいた地域活動	男(n=21)	38%	0%	10%	43%	14%	14%	1.2個
	女(n=9)	22%	33%	11%	33%	11%	11%	
	計(n=30)	33%	10%	10%	40%	13%	13%	
入学後現在取り組んでいる地域活動	男(n=21)	38%	0%	5%	81%	33%	24%	1.6個
	女(n=9)	0%	0%	11%	44%	33%	11%	
	計(n=30)	27%	0%	7%	70%	33%	20%	

⑤今後の意向(複数回答)

今後の意向(図5-12)についてたずねたところ、「自分が住む地域について勉強する」(67%)が最も多く、次いで「新しく地域活動に参加する」(53%)だった。また「大学での学びを地域に伝える」(17%)と考えるようになった人も見られた。

続いて性別による違いに着目すると、男性は「自分が住む地域で仲間づくりを行う」(43%)と考えるようになった人が多く、女性は「自分が住む地域について勉強する」(77%)と考えるようになった人が多い。

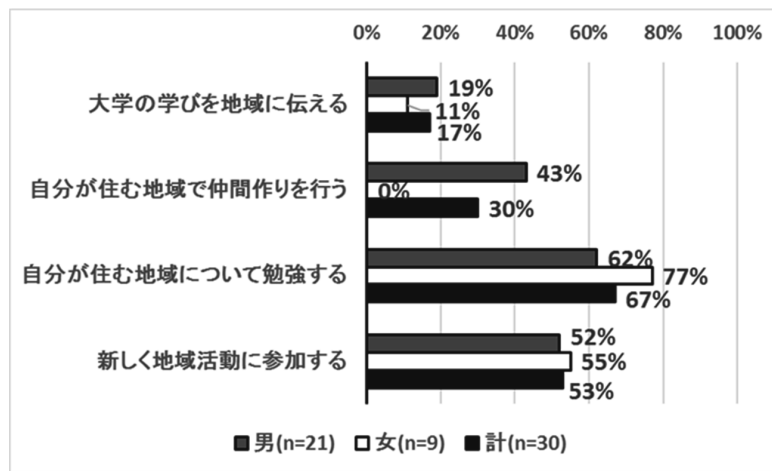


図5-12 今後の意向(n=30)

5-3 テーマ型活動に関する補足調査

テーマ型活動である、奈良フェニックス大学に参加した人々が、その後どのような活動を展開するのかを明らかにするため、奈良県立大学シニアカレッジに通う人を対象に補足調査を行った。回答者は計11人で、うち元奈良フェニックス大学4期生は3人である。

(1) 奈良フェニックス大学4期生のその後の実態

① 奈良県立大学以外の地域活動の取り組み実態

奈良県立大学シニアカレッジ以外の地域活動の取り組み実態(表5-9)についてたずねたところ、3人とも地域活動に参加していた。まず活動内容は、趣味・サークル活動、農業系の活動等で、3人ともテーマ性のある活動に取り組んでいる。続いて活動を始める際に困ったことは、「時間の調整」の回答が多かった。また、シニアカレッジでの学びの活用用途は、座学中心のため役に立たない場合もあるが、座学での知識を実際の活動や、コミュニケーションの場で役立てる人もいた。

表5-9 既存の地域活動の取り組み実態

通し番号		1	2	3
年齢(代)、性別		60代男性	60代男性	70代男性
奈良県立 大学シニア カレッジ以外 の地域活動	種類	趣味・サークル 活動(歴史系)	趣味・サークル、 農業系の活動	農業系の活動
	経緯	単独で	友達に誘われて	単独で
	動機	生きがい	地域参加、 生きがい	地域参加
	始める際 困ったこと	特になし	時間の調整	時間の調整
	学びの 活用用途	学んだ歴史の知識を 活かした	座学中心のため、 役に立たない	コミュニケーションの場 で学びを活かした
	今後参加 したい活動	若者世代のための正し く歴史を学ぶ活動	平城宮跡の ボランティア	仲間づくりの場

②新しい地域活動の立ち上げの実態

奈良フェニックス大学を経て、新たに地域活動を立ち上げた経験の実態についてたずねたところ、新しく活動を立ち上げた経験を持っているのは1人だけだった。その経験について詳しくたずねたところ、まず活動内容は、地域貢献を目的とした地縁型活動で、西大和会という団体に属している活動仲間と一緒に立ち上げていた。しかし、活動の立ち上げる途中、人間関係で苦勞したこともあったが、仲間と連携する際に、シニアカレッジで学んだ知識やノウハウを活かしていた。

③新しい地域活動の立ち上げの意向

今後新しく地域活動を立ち上げるのであれば、どんな活動がしたいかをたずねたところ(表5-10)、「正しい歴史を普及させる活動」、「伝統的な大和野菜の育成と販売活動」、「自分が楽しくなる活動」など、テーマ性のある活動を立ち上げたいという意向が見られた。

続いて、活動を立ち上げる際にどんな課題が想定されるかたずねたところ、協力者や活動場所の確保等、主に組織づくりの課題が想定された。また活動を立ち上げる際に、「学んだ歴史の知識を活動に活かす」、「自分が学んだ知識を仲間に伝える」等、シニアカレッジで学んだことを活動に活かしたいという意向も見られた。

表5-10 新しい地域活動の立ち上げの意向

通し番号		1	2	3
年齢(代)、性別		60代男性	60代男性	70代男性
新しい地域 活動の立ち 上げの意向	活動内容	正しい歴史を 普及させる活動	伝統的な大和野菜の 育成と販売活動	自分が楽しくなる 活動(趣味)
	想定される 課題	特になし	・協力者の確保 ・コンセプト作成 ・土地の確保 ・販売先の確保	・場所の確保 ・組織づくり
	シニアカレ ッジでの学び の用途	学んだ歴史の知識を 活動に活かす	特になし	自分が学んだ知識を 仲間に伝える

(2) 地域活動の課題

続いてシニアカレッジに通う人々に、地縁型の地域活動を始めるのが困難か（表5-11）についてたずねたところ、回答者の64%が「地域活動を始めるのが困難である」と回答した。そして、活動を始めるのが困難な理由（表5-12）についてたずねたところ、「興味のある活動が少ない」、「地域参加に興味がない」、「友人が少ない」、「1人の時間が欲しい」、「どんな活動があるかわからない」等、様々な理由があがった。

表5-11 地縁型の地域活動を始めるのが困難か 表5-12 活動を始めるのが困難な理由

	地域活動を始めるのが困難である	地域活動を始めるのが困難ではない	地域活動を始めるのが困難な理由 ・興味のある活動がない ・地域参加に興味がない ・友人が少ない ・一人の時間が欲しい ・どんな活動があるかわからない
計(n=11)	64%	36%	

また、活動を始めるのが困難である人を対象に、今後参加したいと思う活動（表5-13）についてたずねたところ、農業系の活動、勉強系の活動、音楽系活動、仲間作りの場等の回答があり、テーマ性の強い活動の参加意向が強い。

表5-13 今後参加したいと思う活動

今後参加したいと思う活動	・米作り等農業系の活動 ・歴史を学ぶ勉強系の活動 ・歌や楽器など音楽系の活動 ・仲間作りの場 ・オリンピックのガイド ・自分語りの場
--------------	---

第6章 実態調査の比較

本章では、それぞれの活動を始めた経緯や、地域デビューするための条件、地域デビュー後の意向を明らかにするために、前章で触れた3つの実態調査の比較を行うものとする。

(1) それぞれの活動の概要

3つの活動は、それぞれ活動している人の年代が異なっている。地縁型活動であるふれあい食事会には、40～80歳代の人に参加し、テーマ型活動では、単発型である「世界のボードゲーム大会」には20～50歳代であるのに対し、継続型である奈良フェニックス大学には、55歳以上の年齢制限があるため、55～80歳代の人に参加している。

表6-1 実態調査の比較① それぞれの活動の概要

種類	地縁型活動	テーマ型活動	
		(単発型)	(継続型)
活動名	ふれあい食事会	富雄公民館講座 「世界のボードゲーム大会」	奈良フェニックス大学
活動主体	鳥見地区社会福祉協議会	富雄公民館	奈良フェニックス大学
活動場所	富雄公民館	富雄公民館	郡山市 大和城ホール
活動内容	70歳以上のひとり暮らしの方を対象に、毎月第3木曜日に富雄公民館2階集会室にて、参加者全員で会食する活動。ボランティアスタッフは会場設営や調理、配膳を行う。	地域の子どもから高齢者までを対象とし、ボードゲームを通じて多世代交流や地域参加の実現を目的とした講座型のイベント	退職後の高齢世代を対象に、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを提供することを目的に設立されたシニアカレッジ
調査対象	お手伝いをするボランティアスタッフ	講座参加者の中の大人たち	奈良フェニックス大学4期生
その年齢	40～80歳代	20～50歳代	55～80歳代
年齢制限	なし	なし	55歳以上

(2) 活動を始めたきっかけと動機

活動をはじめたきっかけについてたずねてみると、まず地縁型活動は、地区社協からの誘い(39%)や、活動に携わる知人・友人からの誘い(22%)等、活動の主体者からの口コミをきっかけに参加している人が多い。次にテーマ型活動のうち、単発型は学校で配布されたチラシ(30%)や、市民だよりなどの広報媒体をきっかけに参加している人が多い。継続型も単発型と同じように、広報誌(67%)やホームページ(13%)等の広報媒体をきっかけに参加している人が多い。これらのことから、地縁型活動に参加した人は、活動主体者からの口コミが参加のきっかけとなり、テーマ型活動に参加した人は、単発型・継続型問わず、広報媒体が参加のきっかけになる傾向が見られた。

続いて始めた動機についてたずねると、まず地縁型活動は、地域参加や地域貢献(各56%)等の地域のための理由で参加した人が多い。次にテーマ型活動のうち、単発型は家族の付き添い(77%)、趣味・生きがい(27%)等の理由で参加した人が多く、一方で継続型は、仲間作り(70%)や勉強(63%)等を目的に参加した人が多い。単発型・継続型のどちらも、個人の生活充実や研鑽などの理由で参加が多い。これらのことから、地縁型活動には地域参加や地域貢献に関心がある人が参加し、テーマ型活動は個人の生活充実や研鑽に関心がある人が参加する傾向がある。

表6-2 実態調査の比較② 活動を始めたきっかけと動機

種類	地縁型活動	テーマ型活動	
		(単発型)	(継続型)
始めたきっかけ	・地区社協からの誘い(39%) ・活動に携わる知人・友人からの誘い(22%)	・学校で配布されたチラシ(30%) ・市民だより(23%) ・家族から聞いて(13%)	・広報誌(67%) ・友達からの誘い(23%) ・ホームページ(13%)
始めた動機 (複数回答)	・地域参加(56%) ・地域貢献(56%)	・家族の付き添い(77%) ・趣味・生きがい(27%)	・仲間づくり(70%) ・勉強(63%) ・趣味・生きがい(30%)

(3)活動を始めてからの変化

活動を始めてからの変化についてたずねたところ、地縁型活動・テーマ型活動問わず、様々な意識の変化や効果が見られた。

まず、意識の変化について述べる。地縁型活動では、「地域貢献したい」(58%)が最も多く、他に「より健康に気をつけたい」(31%)、「もっと仲間作りをしたい」(19%)、「趣味・生きがいとして継続したい」(19%)等、様々な意識の変化がみられた。一方テーマ型活動のうち、単発型では「もっと地域参加したい」や、「趣味・生きがいとして継続したい」(各43%)が多く、継続型では「もっと勉強したい」(71%)や「もっと仲間作りをしたい」(62%)等の意識の変化が多く見られた。さらに継続型では、「地域貢献したい」(45%)や「趣味・生きがいとして継続したい」等の意識の変化もあった。

次に、活動の効果について述べる。地縁型活動での効果としては、新しい友達ができたこと(72%)や、鳥見地区の関心が高まったこと(63%)等があり、参加者の地域での新たなつながりを創出するとともに、鳥見地区の関心を高めていた。加えて、趣味・生きがい、仲間作り等、もともと地域貢献とは別の目的で参加した人々の地域貢献の関心が高まっていた(67%)。さらに、仲間作りや健康増進等、もともと趣味・生きがいとは別の目的で参加している人が、趣味・生きがいとして継続することに対して、より意欲的になった(50%以上)。この結果から、地縁型活動は、地域での新しいつながりを創出し、鳥見地区や地域貢献の関心を高めるだけでなく、個人の趣味・生きがいになる可能性を持っている。

続いて、テーマ型活動のうち、単発型では、もともと家族の付き添いで参加した人の地域参加の関心を高め(39%)、趣味・生きがいとしての継続をより意欲的にしていた(35%)。加えて、趣味・生きがい目的で参加した人の地域参加や仲間作りの意欲を高めていた(各25%)。一方継続型では、もともと地域参加や地域貢献とは別の目的で参加した人の、地域参加および、地域貢献の関心が高まっていた(48%)。加えて地域参加および地域貢献の関心が低い人が、特に勉強の継続に対してより意欲的になった。また活動を1年間継続することで、趣味・サークル活動をはじめとする地域活動の参加率が高まった(40%→70%)。

表6-3 実態調査の比較③ 活動を始めてからの変化

種類	地縁型活動	テーマ型活動	
		(単発型)	(継続型)
意識の変化 (複数回答)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域貢献したい(58%) ・より健康に気をつけたい(31%) ・もっと仲間作りをしたい(19%) ・趣味・生きがいとして継続したい(19%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと地域参加したい(43%) ・趣味・生きがいとして継続したい(43%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと勉強したい(71%) ・もっと仲間作りをしたい(62%) ・地域貢献したい(45%) ・趣味・生きがいとして継続したい(40%)
活動の効果	<ul style="list-style-type: none"> ○新しい友人ができた(72%) ○鳥見地区の関心が高まった(63%) ○もともと地域貢献とは別の目的で参加した人の地域貢献の関心を高めた(67%) ○もともと趣味・生きがいとは別の目的で参加した人が、趣味・生きがいとして継続することにより関心を持った(50%以上) 	<ul style="list-style-type: none"> ○もともと家族のつきそいで参加した人々の地域参加の関心を高め(39%)、趣味・生きがいとしての継続をより意欲的にした(35%) ○趣味・生きがい目的で参加した人の地域参加や仲間作りの関心を高めた(各25%) 	<ul style="list-style-type: none"> ○もともと地域参加・貢献とは別の目的で参加した人々の地域参加・貢献の関心を高めた(48%) ○地域参加・貢献の関心が低い人が、勉強の継続に対してより意欲的になった(88%) ○活動を継続することで趣味・サークル活動等の地域活動の参加率が高まった(40%→70%)

(4) 今後の意識

地域デビュー後の意識や展開のうち、まず今後の意向についてたずねたところ、地縁型活動、テーマ型活動の両者とも、様々な意向が見られた。まず、地縁型活動および、テーマ型活動のうちの単発型では、仲間作り（それぞれ36%、43%）意向はあったものの、新たに地域活動に参加する（各3%）という意向は、ごくわずかである特徴がみられた。一方テーマ型活動のうちの継続型は、地域活動の参加（67%）の意向は強く、他に自分が住む地域について勉強する（67%）、奈良フェニックス大学で学んだことを地域に伝える（17%）等の意向がみられた。

続いて今後の活動の展開において、実例が確認できたのは、継続型の参加者のみで、奈良県立大学シニアカレッジの入学や、新しい地域活動をする組織の立ち上げに発展した。

表6-4 実態調査の比較④ 地域デビュー後の意識や展開

種類	地縁型活動	テーマ型活動	
		(単発型)	(継続型)
今後の意向 (複数回答)	・新たに仲間作りをする(36%) ・新しく地域活動に参加(3%)	・新たに仲間作りをしたい(43%) ・新しく地域活動に参加(3%)	・自分が住む地域を勉強(67%) ・新しく地域活動に参加(53%) ・活動で得た学びを伝える(17%)
今後の活動の展開	実例なし	実例なし	・奈良県立大学シニアカレッジ ・新しい活動組織の立ち上げ

第7章 研究の総括と結論

本研究は、地域活動に関心や意欲を持つ人の参加を促すために、地域デビューまでのプロセスの実態から、実現するための条件と課題を明らかにすることを目的とした。

7-1 研究の総括：地域デビューのプロセスの実態と条件

まず、地域デビューするまでのプロセスについて述べる。地縁型活動に参加した人々は、活動主体者からの口コミをきっかけに、地域参加や地域貢献をするという目的を持って地域活動に参加していた。一方で、テーマ型活動に参加した人々は、単発型・継続型問わず、広報誌や市民だより等の広報媒体をきっかけに、個人の生活充実や研鑽を目的として地域活動に参加していた。

続いて地域活動に参加してからの変化について述べる。地縁型活動は、地域での新しいつながりを創出し、自分が住む地域や地域貢献の関心を高めていた。また、趣味・生きがいとして継続することに対してより意欲的になったことから、地縁型活動そのものが、個人の趣味・生きがいになる可能性を持っている。一方で、テーマ型活動は、単発型・継続型問わず、特に地域参加の関心を高めていた。加えて、趣味・生きがいとして継続や仲間作り、勉強等の意欲を高めたことから、新たな活動に発展する可能性を持っている。また継続型では、活動を継続することで実際の地域活動の参加率を高めていた。加えて、継続型では、その後の活動展開の実例があり、活動仲間と共に新しく地域活動をする組織を立ち上げることに発展していた。

このような地域デビューのプロセスは、地縁型とテーマ型で異なっていることが明らかになった。活動参加によって地域への参加意欲が向上するなどから、地域デビューには段階があり、ひとつの地域活動への参加がきっかけとなり、次の活動に展開する人もいる。

その実態から、地域デビューを円滑に行うための条件として、地縁型活動の参加を促すには、特に地域参加や地域貢献に関心を持っている人々を、活動主体者が仲間に誘うことが必要である。またテーマ型活動の参加を促すには、単発型・継続型問わず、個人の生活充実や研鑽に興味を示している人々を対象に、チラシや市民だより、広報誌、ホームページ等の広報媒体を用いて宣伝することが必要である。

7-2 研究の結論：地域デビューを円滑に行うための課題

近年、地域課題の解決や個人の生活の充実のために、地域活動の参加の促進が重要であり、関心のある人が容易に活動を参加ができるようにすることが求められている。実態調査の結果から、地域活動のうち、地縁型活動は地域参加および地域貢献、テーマ型活動は生活充実や研鑽と、始めた動機がそれぞれ異なる傾向にある。また、地縁型・テーマ型問わず、活動に参加した人々は、地域参加または地域貢献の関心が高まり、自分が住む地域の勉強や仲間作りに取り組みたいという意向が強まった。

このような実態から、地縁型活動とテーマ型活動の両者ともに、仲間作りや地域について学びながら地域貢献を目指す、テーマ性のある地縁型活動に発展する可能性を持っている。今後、テーマ性のある地縁型活動を実現し、より多くの人々が地域活動に携われるように、地縁型活動とテーマ型活動の相互の連携や一体化が課題となる。

地縁型活動とテーマ型活動が連携または、一体化できるように、まず既存の地縁型活動にテーマ性を持たせ、テーマ型活動には活動内容に地域貢献の要素を加えることが必要である。例えば、地縁型活動であるふれあい食事会に、ボランティアの人たちが自分でメニューを考え、ふれあい食事会の当日に考えたメニューの調理を実践する等、料理をテーマとした活動内容を追加し、テーマ性のある地縁型活動に形を変えていくことが考えられる。一方でテーマ型活動では、奈良フェニックス大学の教育学部に、実際に地域に出て、学んだ知識や地域づくりのノウハウを活かして、地域づくりの活動に取り組む制度を新たに加える等、既存のテーマ型活動に地域貢献の要素を追加することが考えられる。

また、「興味のある活動がない」、「どんな活動があるのかわからない」等の理由から、新しく地域活動を始めることが難しいと感じている人も存在する。そこで、新規で地域活動に参加し、今後新しい活動への展開が容易にできるように、活動意向のある人の興味や目的に合った活動を提案する「地域活動のリクルーター」の育成が求められる。

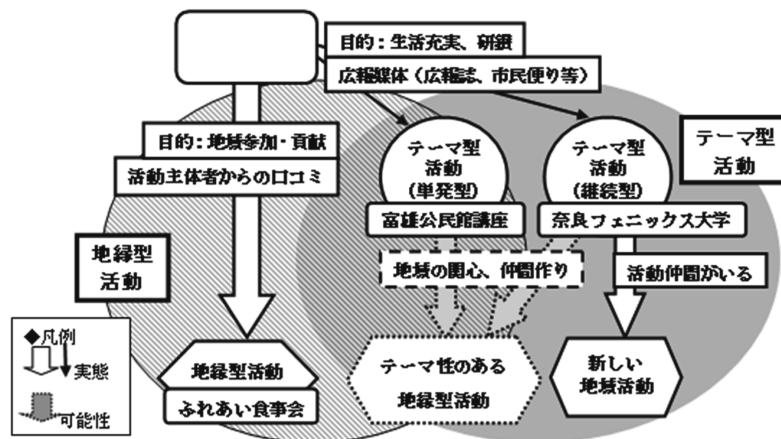


図7-1 地域デビューのプロセスの実態と条件

[参考資料]

第1章

- 1) 内閣府、2010年、「高齢社会白書」
- 2) 佐藤葉・清水まさみ、2009年、「60歳から少しだけ社会貢献を始める本」、株式会社実務教育出版
- 3) 細内信孝、2007年、「団塊世代の地域デビュー心得帳」、株式会社ぎょうせい
- 4) 山崎丈夫、2003年、「地域コミュニティ論」、自治体研究社

第2章

- 1) 山崎丈夫、2003年、「地域コミュニティ論」、自治体研究社
- 2) 内閣府、2008年、「男女共同参画白書」
- 3) 株式会社日本総合研究所、2005年、「市民活動が地域にもたらす効果に関する調査報告書」
- 4) 内閣府、2004年、「国民生活白書」
- 5) 佐藤葉・清水まさみ、2009年、「60歳から少しだけ社会貢献を始める本」、株式会社実務教育出版
- 6) 内閣府男女共同参画局、2012年、「男性の地域活動への参画 好事例集」
- 7) 内閣府、2008年、「平成20年版高齢社会白書」
- 8) 9) 内閣府、2011年、「平成22年度国民生活選好度調査」
- 10) 内閣府、2004年、「平成15年度国民生活選好度調査」
- 11) 14) 松本すみ子、2010年、「地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア～」、東京法令出版株式会社
- 12) 水無田気流、2015年、「『居場所』のない男、『時間』がない女」、三松堂株式会社
- 13) 細内信孝、2007年、「団塊世代の地域デビュー心得帳」、株式会社ぎょうせい

第3章

- 1) 奈良市保健福祉部福祉政策課、2016年、「校区別・住民基本台帳」
- 2) 内閣府、2010年、「平成22年度国勢調査」
- 3) 内閣府、2015年、「平成27年度国勢調査」
- 4) 奈良市社会福祉協議会 HP <http://www.narashi-shakyo.com/>
- 5) 鳥見地区社会福祉協議会、2006年、「鳥見地区福祉実施計画書」
- 6) 富雄公民館 HP https://manabunara.jp/contents_detail.php?frmId=7
- 7) 奈良フェニックス大学 HP napco.jpn.org/